

## 引用（省略・下線は引用者による）

- (1) 「言語学の概説書などを見ると、文字については大概無視されるか、書いてあってもほんの付けたり程度に過ぎない。(…)言語学の中で何故かくも冷遇されているのであろうか。その答は簡単である。言語学を生み、育ててきたヨーロッパにおいては、アルファベットを使っていて、そのアルファベットは原則として単音文字であり、一字が一音を表すということで、文字を通していきなり音に取りかかることができると思っているからである。文字はいわば透明な眼鏡で、物が見えさえすれば眼鏡のことなど気にしないのである。」([11], p. 2)
- (2) 「(...) 文字の研究のむつかしい第一の理由は、文字そのものの本性にあるのである。文字は言ふまでもなく、言語を写しとどめるものとして生れた二次記号である。だから常に言語に平行して、それを完全に写し得るものならば、文字だけが特に複雑な相を呈することはないわけである。しかし実はそれでも、言語が変化するものであるからといって、その変化に常に応じて文字が変ずるといふことはあり得ない。(…) 平行しないのみならず、第一完全に写すなどといふことがあり得ないのである。(…) 表音文字の場合ですら、言語を完全に写し得る文字などは無いのである。言葉調子、イントネーションは勿論のこと、アクセントや個々の音韻に対しても一対一の関係に徹することなどなかなか困難なのである。
- さうして更に重要なことは、(...) 今日の文化民族にあつては、表意文字を使ひつつも、読む場合には音韻を必ずしも媒介としないで、直接視覚表彰から意味に結びつけて理解しているのである。(…) かうして、一往は二次記号でありながらそれには多くのずれができるのみならず、積極的に、文字だけの世界を作らうとするのである。」([4], p. 3)
- (3) 「音声言語はそもそもある一定の現実の場面に話手と聴手がいて、その間に行われる伝達の重要な手段である。その伝達は従って直接的伝達である。音声は発せられても時々刻々に雲散霧消して迹を残さない。(…) 文字言語は主として間接的伝達の役に廻る。(…) 文字が間接的伝達に役立つのは、文字という視覚記号が聴覚記号に比べると恒久性があるからである。文字による記録は書かれた瞬間に消えるようなものではない。(…)
- 文字が間接的伝達に役立つというその本来の使命は、恐らく最初は空間的な、いわば横の連絡のためのものであつたであろう。しかしそれはやがて縦の連絡、すなわち時間的距離を隔てての連絡にも役立つことになった。(…)
- (…) 音声に依る言語は性質上、場面に依存する度合いが大きい。(…) これに対し、文字言語ではそうはいかない。もちろん、文字言語といえども言語である以上は、それ特有の言語的場の中で行われる。(…) しかし音声言語を支えている現実の場面が欠けており、原則として書手と読手は同一場面に参与しない。(…)
- 音声言語と文字言語の相違はさらにその歴史的発展の上にも明瞭に現れる。音声言語の変遷は前の世代から後の世代へと連続して継承して行く間に次第に現れてくるが、文字言語の変化は非連続的である。」([11], p. 5-7)
- (4) 「前期デリダはいくつかの論文で、「同じ *même*」と「同一的 *identique*」という二つの形容詞を峻別し用いている。(…) 論文「署名 出来事 コンテキスト」でデリダは、「署名の同じもの性 [*mêmeté*]」こそが、署名の同一性 [*identité*] と単独性を変質させることで署名の封印を分割する」と記している。ここで「署名」という語は、記号一般がもつ性質を際立たせるために用いられたものだと考えてよい。記号は反復される。しかしそれは同一のものではない。それぞれの記号は、反復されるたびに異なったコンテキストに規定されるからだ。それはいわゆる「署名」が、反復されつつも、また書くたびに異なった筆跡で記されるのと類比的な現象である。(…)
- 「同一性」はコンテキストにより与えられる。それゆえ同じ記号でも、異なったコンテキスト内であればそれらはもはや同一ではない。しかし「同じもの性」はそれとは異なる。デリダの用語法にお

いてはそれは、記号の「反復可能な、繰り返し可能な、模倣可能なひとつの形態」を指示する。記号は記号である以上、つねにこの形態的な反復可能性に支えられている。そしてこれはエクリチュールの観念と等しい。なぜなら、エクリチュールが記号に与える引用可能性、つまり記号が本来のコンテキストから「断絶」する力は、異なった複数のコンテキストを貫いてひとつの記号が「同じ」であり続ける可能性により保障されるからだ。(…)

ここでひとつの隠喩を導入しよう。英語の war やドイツ語の war は、それぞれ意味=同一性に満たされている。対してエクリチュール「war」はそうではない。「war」は諸言語のあいだを循環し、つねに「同じもの」であり続けながら異なった同一性を受け取る。七〇年代以降のデリダは、エクリチュールのこの「受容体」的特徴、「根底的な処女性」を名指すためしばしば「コーラ khôra」という隠喩を用いている。それはプラトンの対話篇『ティマイオス』で用いられたギリシア語であり、一般には場所、容器、苗床、国家などを意味する。この隠喩においては、ひとつのエクリチュールが複数のコンテキストに同時に属することは、ひとつの容器<sup>コンテナ</sup>に対し複数のコンテキストが同時に意味を流し込むこととして捉えられる。英語とドイツ語は「war」というひとつの容器を分かちあう。」([1], p. 35-38)

- (5) 「西田 (...) 私はやはりこの「六書」の分類は、転注は少しやっかいですが世界のすべての文字に適用できる原理だと、そう思いますね。」([12], p.154)
- (6) 「同じと判定される文字の集合について、字形の異なりを捨象して得られる文字観念を文字素とよぶ。」([7])
- (7) 「文字の構成要素である形・音・義を、以下では字体素・音素・意義素とよぶ。表語文字においては、この三要素が必要であるが、表音文字においては、意義素をかく。(…)

この三要素は、文字素を構成するという点では、同等の資格を持つ。それぞれの関係という面からは、親疎の差がある。(…)

	形	音	義	例
①	=	=	=	(同字)
②	=	=	≠	(該当例なし)
③	=	≠	=	(該当例なし)
④	=	≠	≠	芸(ゲイ) — 芸(ウン)、缶(カン) — 缶(フ)
⑤	≠	=	=	単—單、齒—齒、円—圓、亀—龜
⑥	≠	=	≠	知—智、編—篇、付—附、激—劇
⑦	≠	≠	=	足—脚、暖—温、作—製、使—用
⑧	≠	≠	≠	(別字)

([18], p.25-26)

- (8) “The Unicode Standards draws a distinction between *characters*, which are the smallest components of written language that have semantic value, and *glyphs*, which represent the shapes that characters can have when they are rendered or displayed. Various relationships may exist between character and glyph: a single glyph may correspond to a single character, or to a number of characters, or multiple glyphs may result from a single character.” ([22], p. 13)
- (9) 「ここ (=附属書 6) で示す例示字体、部首、画数、音訓などは、一般に用いられている漢字とこの規格でビット組み合わせを規定する図形文字との対応を示し、文字の同定を容易にするためだけに用いるのであって、漢字の字体・字形、部首、画数、音訓などに対して、何ら制限するものでもなく、また、いかなる規準を与えるものでもない。  
これらの部首分類、画数、音訓などは、文字同定用の補助的情報であり、あくまで参考であって、規格がこれらを規定するものでもなく、推奨するものでもない。」([17], p.61)
- (10) 「(...) 問題点としては、JIS 包摂規準がよくできているため、漢字の字体認定基準として一般性を獲

得してしまっていることがある。(…) JIS は漢字字体の標準を決定する規格ではない。しかし、過去に「鷗」を「鷗」に変更するようなことがなされたため、JIS X 0208:1997 がわざわざ字体の標準を決める規格ではないと宣言した程度では、一般の認識が改まるわけではない。

JIS は情報交換のために一般に存在する漢字の字体をどのように符号化すればよいかを決めているだけであって、字体の標準化を意図するものではない。結果的に字体の標準化に貢献することはあっても、議論の順序としてこれらを混同することは回避しなければならない。繰り返しになるが、重大な問題なので繰り返し強調しておきたい。」([3], p. 71)

- (11) 「西田 (...) 甲骨文は、当時の口語からずいぶん掛け離れたものだと思います。しかしその掛け離れたものを書き表すときにその字形を創ったわけで、その当時はたぶん口語を書き表そうなんてつもりはまったくなかったと思います。(…)

河野 (...) あるいは文字が全然ないアイヌみたいなどころでは、ユーカラのような口頭伝承がありませんね。(…) 金田一先生の講義はぼくはすっかり忘れてしまったけれども、ユーカラのアイヌ語と口語のアイヌ語とは違うのだ、ユーカラのほうが古いのだというお話を聞いたことがあるんです。おそらくその通りで、ある時期の祭儀とか、一般に集まって祝詞を奏するとか、そういう儀式で使われる話し言葉の伝承があって、それをまず文字ができたときに書いたのではないかと思うのですがね。」([12], pp. 119-120)

## 参考文献

- [1] 東浩紀『存在論的、郵便的—ジャック・デリダについて』(新潮社、1998)
- [2] 後藤朝太郎『文字の研究』(森北書店、1942)
- [3] 池田証寿・高田智和・上野千沙・岡墻裕剛「JIS 包摂規準の有効性とその応用 — 「常用漢字表」(昭和6年)と「標準漢字表」(昭和17年)とを例に—」(池田証寿編『古辞書と JIS 漢字』5、2002)
- [4] 池上禎造「文字論のために」(『国語学』23、1955)
- [5] 犬飼隆『シリーズ〈日本語探求法〉5 文字・表記探求法』(朝倉書店、2002)
- [6] 樺島忠夫「集合としての文字」(『語文』32、大阪大学文学部国文学研究室、1974)
- [7] 樺島忠夫「文字の体系と構造」(『岩波講座日本語 8 文字』、1977)
- [8] 鹿島英一『文字の情報理論序説』(風間書房、1997)
- [9] 川幡太一「新 ISO/IEC 10646 と Unicode の漢字を検証する」(『漢字文献情報処理研究』2、2001)
- [10] 菊池久一『「識字」の構造—思考を抑圧する文字文化』(勁草書房、1995)
- [11] 河野六郎『文字論』(三省堂、1994)
- [12] 河野六郎・西田龍雄『文字最真 文字のエッセンスをめぐる3つの対話』(三省堂、1995)
- [13] Kripke, Saul A., *Naming and Necessity*, Harvard University Press, 1980. 八木沢敬・野家啓一訳『名指しと必然性』(産業図書、1985)
- [14] 師茂樹「タグ付き言語と文字コード」(小林龍生・安岡孝一・戸村哲・三上喜貴編『インターネット時代の文字コード』、共立出版、2000)
- [15] 師茂樹「GB18030 とは何か 大陸の戦略」(『漢字文献情報処理研究』2、2001)
- [16] 師茂樹「ソフトウェアレビュー CHISE プロジェクト」(『漢字文献情報処理研究』3、2002)
- [17] 日本規格協会『JIS X 0208:1997 7ビット及び8ビットの2バイト情報交換用符号化文字集合』
- [18] 野村雅昭「同字と別字のあいだ」(『日本語学』3-3、明治書院、1984)
- [19] Ong, Walter J., *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*, Routledge, 1988. 桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』(藤原書店、1991。本稿での引用は邦訳による)
- [20] 佐藤栄作「漢字字体とは何か」(『日本語学』17-12、明治書院、1998)

- [21] 當山日出夫「漢字コードをめぐる諸概念について 漢字シソーラスは可能か?」(『研究報告 人文科学とコンピュータ』23、1994)
- [22] The Unicode Consortium. *The Unicode Standard, Version 3.0* (Reading, MA, Addison-Wesley, 2000. ISBN 0-201-61633-5).
- [23] 山田崇仁「電腦東洋学を語る前に 一漢字を巡る問題と『康熙字典』一」(『人文学と情報処理』24、1999)

## サンプル

### XEmacs-CHISE の define\_char の例

```
(define-char
  '((ideographic-radical . 50) ; 巾
    (ideographic-strokes . 7)
    (total-strokes      . 10)
    (ideographic-structure
     ?
     ?穎
     ?巾)
    (shinjigen-2 . 2104)
    (=jis-x0208 . #x3B55) ;
    (korean-ksc5601 . #x5E54) ;
    (chinese-cns11643-1 . #x553A) ;
    (chinese-gb12345 . #x4A26) ; 師
    (chinese-big5 . #xAE76) ;
    (ideograph-daikanwa . 08916) ;
    (ucs . #x5E2B) ; 師
  ))
```

### sample1.pl

```
use CHISE;

my $s1 = CHISE->new(ideograph_daikanwa => 6942); # 「字」
print $s1->dumpAttr;
print $s1->strokes, "\n"; # 画数を表示
```

### 出力結果

```
shinjigen_2 => 1777
ideograph_daikanwa => 6942
ucs => 23383
chinese_iso165 => 22358
=jis_x0208 => 15226
chinese_gb2312 => 22358
chinese_cns11643_1 => 18291
chinese_big5 => 42610
```

```
korean_ksc5601 => 27950
ids4perlchise => ㄱ子
total_strokes => 6
ideographic_radical => 39
ideographic_strokes => 3
6
```

#### sample2.pl

```
# compare の sample
use CHISE;

my $s1 = CHISE->define_char(strokes => 12, radical => 9);
my $s2 = CHISE->define_char(strokes => 12, radical => 9, ideograph_daikanwa => 694);
my $c = $s1->compare($s2);

if ($c == $CHISE::EXCLUSIVE) {
    print "排他的\n";
} elsif ($c == $CHISE::HAVE_INTERSECTION) {
    print "共通集合あり\n";
} elsif ($c == $CHISE::PROPER_SUBSET) {
    print "真部分集合\n";
} elsif ($c == $CHISE::PROPER_SUPERSET) {
    print "真上位集合\n";
} elsif ($c == $CHISE::EQSET) {
    print "完全一致\n";
}
```